

諦崇寺報

発行 藤井崇文
編集 藤井崇文
〒631-0065
奈良市鳥見町
2丁目28-10
0742(37)2569
www.rittouji.jp

むやみに 卑下することなかれ

今から800年ほど昔、ある在家の方が道元禪師にこのように仰いました。

「私は仏教を学ぶ志はあるんですが、生まれつきの能力が劣っております。ですから、仏さまの教え通りに修行するのはとても耐えられません。」

道元禪師は、こうお答えになりました。

「いえ、真実の仏法とはそのようなものではありません。まず心を持つているからには、善悪を区別することが出来るはず。そして、手も足もあるのですから、合掌したり歩いて修行する分には、もうそれで充分ではないですか。仏さまの教えを實踐するのには、何も特別な才能は必要ありません。素質の良い悪いは問題ではありません。その代わり、仏道を学ぶ人は明日を当ててはいけません。今この時しかないと考えて、仏さまの教えをまっすぐに実践してください。」

手を合わせるのに何も特別な手は必要ありませんし、指輪も高価な時計も必要ありません。坐禅をするのに、モデルさんみたいにスラッとした長い脚も必要ありませんし、マラソン選手みたいな脚力も必要ありません。もし脚がお悪いんでしたら、椅子に腰かけて脚

を組まずに行う坐禅もあります。

手や脚にお怪我などで不自由があっても、私みたいにオッチョコチョイな性格であっても、「むやみに自分自身で卑下すること無く、今のこの身体、この能力をもって仏道を行ってゆきなさい。その代わり、時間を無駄にしてはいけません。」というごなんぞです。「そうすれば必ず悟りを得られます。何も心配する必要はありません。」と大鼓判を押し下さるんです。

さらに道元禪師は続けて、「人間は誰でも、仏法を聞いて悟りを得る資格があります。その能力が無いと思っはけません。お釈迦さまの時代、修行する人が皆、すべられていた訳ではありません。仏さまの教えのままに修行すれば、必ず悟りは得られます。」

「このように起こしにくい道心(仏教を求め志)を起こし、行いにくい仏道を行っていく、そうすれば必ず自分にとって進歩となります。人は誰でも仏となれる本性を持っているのです。だから、むやみに卑下してはいけません。」と仰ったのです。

この道元禪師の「むやみに、卑下してはならない。」というのは特に勇気付けられるお言葉だと思います。今の時代でも、私においてもそうなんですが、「自分には出来へんなあ。ちょっとそこまでは無理なんちゃうかなあ。」と云って、自分を必要以上に卑下して、自分自身で限界を決めてしまいう、そうなるてしまいがちです。

道元禪師は今から800年ほど昔の方ですが、その時代の人々も今と同じような悩みというか、ある種弱さを持っていて、それに対して「自分をもっと尊敬して、大切にしてください。」と仰っています。この「むやみに、卑下してはいけません。」というのは、ある意味では「もっと頑張れ。」という厳しいお言葉です。けれども、

「頑張れば出来るんだよ。」というとても優しい気持ちも含まれています。また、「叱咤激励のお言葉であると感じます。」

今回は道元禪師の「むやみに卑下することなかれ。」というお言葉を紹介しました。これからの皆さまの日々の中で、それは仏教に關することだけではなく、例えば「そんなええお父さんにならんわ。」とか「そんなええ子供にならんわ。」とか、そんなことは決して思わずに、自分をもっと尊敬して、もっと大切に、そうするお言葉を日々の生活に活かすことに繋がるのではないのでしょうか。

この「むやみに卑下してはならない。能力が無いと思っはけません。」という道元禪師のお言葉をぜひ覚えておいてください。

『正法眼蔵隨聞記』

孤雲 懷辨 記
篠原 寿雄 編
一九八七年 大東出版社
二、九〇〇円(税抜)



『正法眼蔵隨聞記』を読んてまず第一に感じるのは、道元禪師のお言葉を書き記した、懷裝禪師の喜びの気持ちです。

懷裝禪師が受けた感動は八百年の時を超えて、現代の私たちにも瑞々しく伝わってきます。

道元禪師のお話を聴いて、懷裝禪師の中にあつたもやもやとした気持ちが消え、希望の光に満ち溢れる喜びの様子が、話題の選び方や文体からよく伝わってきます。

身近な話題を選び、読む者に対して飛躍を求めない文体だからこそ、真に迫った美しさがあります。道元禪師はご自身の著作以上に、そのお姿が生きて感じられ、懷裝禪師だけでなく、在家信者や

仏道を学ぶ初心者に対して、ときに厳しくそして優しく教え導いておられます。

もちろん、同じ日本であっても時は過ぎて、社会や人々の暮らしは変化しています。けれどもそんな違いが些細に感じられ、時空を貫いて私たちにも届くものがあります。

私はそれは「親心」だと思ひます。道元禪師の教えである「三心(喜心・老心・大心)」のひとつ「老心(老婆心)」です。

何度も繰り返して説かれる道元禪師のお言葉は、「正しい道を歩んで欲しい」と我が子に願う、父母の心そのものです。

『正法眼蔵隨聞記』は道元禪師のお言葉を記したのですが、より正確な道元禪師の教えは『正法眼蔵』を始めとした道元禪師ご自身の著作に学ぶことが本来でしょう。ゆえに『正法眼蔵隨聞記』から私が学ぶのは、道元禪師の親心であり、懷裝禪師の喜びの気持ちであり、打ては響く清々しいまでの師弟關係です。

さらに言えば『正法眼蔵隨聞記』は、懷裝禪師が示寂された後、懷裝禪師の弟子たちによって発見され、編纂されています。その弟子たちの思いも重なった「親心の連鎖」があるからこそ、現代の私たちも道元禪師が教えを説かれる場面に立ち会うことが出来るのです。それは私たちにとって喜びであり、願わくは「正しい道を歩んで欲しい」という先人の親心に応えるよう努めなければなりません。子を思う親の心、弟子を思う師匠の心、後世の人たちを思う先人の心、まさしく仏さまの教えそのものではないでしょうか。人々の日々を見つめる、仏教の臨場感が凝縮されているのが『正法眼蔵隨聞記』だと思ひます。

前号へのご意見・ご感想、本当にありがとうございました。がどうございました。



あとがき

皆さまの声を励みにして、「むやみに卑下することなく」寺報を続けようと思ひます。 崇文 拜

生涯学習セミナー



平成二十二年一月二日に、檀家の小川様が施設長を務められて二名公民館において、生涯学習セミナーの講師を務めました。